

第 52 回言語文化教育研究学会月例会

汎ヨーロッパレベルで、いま何が言語教育研究の課題となっているのか

欧州現代語センター(ECML/CELV)滞在報告

山本冴里さん (山口大学)

私は2017年3月の下旬から4月はじめにかけて欧州現代語センター(European centre for modern languages/ Centre Européen pour les langues vivantes)に滞在する機会を得ました。これは、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)など日本でも波及力を持つ言語教育の枠組みをつくった欧州評議会の下位組織です。

欧州評議会では、言語教育政策を練るのは、言語政策局という部局です。それに対して欧州現代語センター(ECML/CELV)は——プログラム統括責任者であるSusanna Slovensky 女史の言葉を借りれば、「研究や理念、政策と教育現場の実践をつなぐこと」を使命としています。

CEFRとおなじく、欧州評議会の提案した文書のなかに、『ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』があります。日本語版は2016年5月に拙訳で出版されていますが、私は、これを訳していく過程で、幾度も、「現実は今このようであり、どのように変えていこうとされているのか」ということを知りたく思いました。たとえば6章10節では「あらゆる言語教育の間での協調と効果的な連携」が重要視されているのですが、では、その具体的な方策はどのようにして考えられ、どのように伝えられていくのか、といったことを間近で見てみたくなったのです。

欧州現代語センターに打診してみたところ快諾をいただき、滞在中は、許される範囲で、センターで次々に開催される専門家の打ち合わせや、教師養成のワークショップづくりに陪席しました。また、専門職員の方にインタビューを行いました。

月例会では、1) 欧州現代語センターとは 2) そのプロジェクトテーマは何で、どのように決められるのか 3) プロジェクト例の紹介—言語・文化の多元的アプローチのための参照枠(CARAP/FREPA)の場合、の順で、滞在中に学んだ事柄について報告します。そのうえで、4) 会場の皆さんと一緒に、<北東アジアで、できること>を考えていきたいと思えます。

北東アジアには、欧州評議会に相当する超国家組織はありません。欧州現代語センターに相当する、(各国家ごとではなく)アジアでの言語教育をより民主的なかたちで充実させていこうとする機関も、そうした方向に導こうとする政策的なイニシアティブも不在です。けれど、もしかしただからこそ、言語教育を生きる私たち教師、教育研究者の活動が——きわめて限定された文脈であっても——時には決定的な意味を持つものかもしれない、と思います。日、英、韓、中、独、仏、そのほか何語の教育に関わる方も、またどのような立場に関わる方(関わろうとする方)も、歓迎します。

欧州現代語センター <<http://www.ecml.at/Home/tabid/59/language/en-GB/Default.aspx>>

欧州評議会(2016) 山本冴里訳『言語の多様性から複言語教育へ：ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』くろしお出版

・日時:2017年6月23日(金)18:00~19:45

・会場:早稲田大学早稲田キャンパス22号館512教室

・参加費:無料

・予約:不要(当日、直接会場にお越しください。)

・お問い合わせ:monthly@alce.jp(月例会委員会事務局)